



<右幅：参考>

5 猿之図 森狙仙 二幅（三幅対のうち）

絹本着色

江戸時代後期（十八〜十九世紀）

本紙各二一九・〇×四〇・五

森狙仙（二七四七〜一八二二）は、応挙が活躍した時期に、大坂において応挙の影響を受けつつ、写実性を重視して独自の画風を確立していった絵師である。養子徹山、さらに一鳳、寛斎へと続く森派の祖となる。『猿描き狙仙』とも異名をとるほどに猿猴図を得意とし、動物画に優れていた。

本作品は、親子の猿などを描き入れて三幅対としたもので、いずれも背景に薄墨をはくのみとし、猿そのものの描写が際立つ作品である。体毛の趣を出すために、毛の一本ずつが丁寧に引かれ、顔の表情や姿態など、その優れた写実技法によって、細かな表情が描き入れられ、猿の剽軽さや、愛らしさが伝わってくる。狙仙は、他にも鹿図などの動物画を描いているが、応挙の活躍した時期、写実的描写をそれぞれに追求した絵師たちが、互いに影響しあいながら切磋琢磨してそれぞれの画風を示していくことになるが、自由な立場で自らの表現を追求する絵師たちにとっては、互いの存在に恵まれた時期であったとも言えよう。狙仙もまた写生と観察を繰り返す中で習得したのであろう独特の猿の描写は、質感や情感豊かで、その表現を画風として極めた、ということになる。狙仙から始まる森派の絵師たちは、応挙から始まる円山派の絵師たちとごく近い位置で画風を継承して存続し、近代への架け橋を築いた。

森派は、後に山口の毛利家と関係を持つが、本図はその毛利家からの献上の品である。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections